

## 序

本書は『源氏物語』の表現のあり方とともに、絵画化の様相をあわせて考察するものである。軸とするのは、夕霧の物語についてである。

物語の表現については、表現自体の意味や役割を考えるよりも、語る内容を取捨し、如何に印象付けて語るのかという物語の表現方法に着眼する。その理由は、たとえ同一の表現や事柄であつても巻や作中人物ごとに異なる文脈を形成したり、人物像や位置付けが転じたり、和歌や史実などの引用の仕方が違つたりと、物語展開の中でその位相が大きく変化することにある。ここには恣意や偶然ではなく、何らかの意図が反映されていると考えられ、その狙いを読み解くことに関心を抱くからだ。本書では、物語の表現に見られる意識的な偏りや傾向から作中人物や表現、引用などの役割の差異や変容を把握することにより、物語の企図や表現構造、長編化を支える物語の論理に迫りたい。

とりわけ注目したいのは、子どもとその成長をめぐる表現である。その点で重視されるのが、夕霧の存在である。ちなみに、人物論の研究史を試みに振り返ると、正編では光源氏、そして、紫の上や藤壺といった源氏と関係を持つ女君に強い関心が向けられてきた。また、明石一族や内大臣家、右大臣家など、源氏を補完したり、彼と対峙したりする家の人物たちについても同様に研究の進展が見て取れる。さらに、続編では、薫と匂宮をはじめ、大君・中君・浮舟、果ては八宮や女一宮まで研究が重ねられる状況にある。正編と宇治十帖とは物語の構造自体が違うため一概には扱えないが、宇治十帖においては夕霧よりも登場機会や物語への関与の程度などではるかに及ばない人物までも論述の対象となる。

夕霧は、物語世界の中では光源氏の実子として、比肩し得る者のない血統と将来性を有する点で、本来はその動向に衆目が集まるはずの人材である。にもかかわらず、物語の全編に亘って中心的な位置を占める人物でないからか、或いは源氏とは逆の実直な人物像からか、際立つ血筋に見合う存在感が希薄である印象も拭えない。こうしたあり方を映すがごとく、夕霧に関する先駆的研究は、「まめ人」で括られる人物像<sup>(1)</sup>、五節舞姫との交渉をめぐる源氏と夕霧の対照性<sup>(2)</sup>、「野分」巻における視点人物的な役割、「可能態」としての垣間見、「夕霧」巻の和歌的文脈や風景描写<sup>(5)</sup>、源氏と夕霧の恋物語の類縁性<sup>(6)</sup>、「夕霧」巻の人物造型への「若菜上・下」巻の影響など、夕霧の存在が目立つ箇所に限って議論が集中する傾向にあった。

とはいえ、近年における研究では、「少女」巻での初叙や大学入学、幼な恋、第二部で展開される夕霧と落葉宮の物語の位置付け、夕霧の視点の問題などで大きな進展が見られた。初叙に関しては第一章で詳述するが、元服直前に源氏が「四位になしてん」と考えたことを、親王に準ずる源氏の境遇の反映とするか、<sup>(8)</sup>律令や物語における源氏の地位を読者に考えさせる言葉とするか、<sup>(9)</sup>撰閲家子弟のように叙爵後すぐに四位に上げるとするかで意見が分かれるが、夕霧にまつわる表現が積極的に解釈される箇所として目を引く。

また、大学入学では漢学重視の方針によって冷泉帝治世の聖代視が図られたり、夕霧を大学に入れ「有職」を養成する大学寮の復興と文章経国を印象付けたりするという政治的な動向以外に、学問の習得と幼な恋の展開から夕霧の造型が源氏とは別種であると指摘される。<sup>(13)</sup>また、『伊勢物語』の筒井簡章段が引かれる幼な恋では、夕霧との関係において「もとの女」であった雲居雁が「夕霧」巻では高安の女にずらされ、夕霧と落葉宮の恋物語の中で「あはれ」に相反する存在でありながらも否定的に描かれなことから、「みやび」や「あはれ」から構成される六条院世界の美的理念を揺るがす側面も見出される。<sup>(14)</sup>

第二部における夕霧と落葉宮の物語の位置付けをめぐっては、夕霧が落葉宮と結婚して一条宮を手に入れ、源氏や明石姫君と並び朱雀院家との紐帯を確保したことは予言された太政大臣への道に寄与するとされる他、<sup>(15)</sup>源氏と紫の上の関係とともに、第二部の物語では男性が恋愛や結婚を主導できず、亀裂が深まる皮肉が浮き彫りにされた。<sup>(16)</sup>或いは第二部前半での柏木と女三宮の物語が夕霧と落葉宮にも引用・反復されることにより女性たちの苦悩や悲嘆が照らし返され、その主題は宇治十帖にも引き継がれるとの指摘もある。<sup>(17)</sup>また、「夕霧」巻の「ぬりごめ」は開けられることを前提とし、源氏と藤壺の時のような禁忌のメタファーと成り得ない点で六条院世界を異化する批評的な表現の磁場を獲得すると論じられる。<sup>(18)</sup>そして、「夕霧」巻での竹取引用は、夕霧と竹取の帝や求婚者たち、落葉宮とかぐや姫を対比させ、俗世に生きる他ない現実を突き付けたという。<sup>(19)</sup>さらには、恋物語を機に内省する源氏と人目ばかりを気にして自らを振り返らない夕霧を対照させ、源氏の抱える愛執や孤独を際立たせるとの説や、<sup>(20)</sup>落葉宮の住む一条宮の場に着眼し、源氏に接する藤典侍、致仕大臣（元頭中将）に連なる雲居雁のいずれの影響も及ばない居所を落葉宮との婚姻によって夕霧が獲得した意味を読み取る説など、<sup>(21)</sup>多くの見解が示されてきた。

そして、夕霧の視点についても多様な意見が出されている。世間体を重んじる人物造型からは、社会的規範を逸脱することで視野に入る状況は捉えられないとの指摘がある。<sup>(22)</sup>「野分」巻では、夕霧のまなざしが秋と冬には及ばず、秋好中宮や明石君の町を見ることがないばかりか、喩にも秋冬の草花が挙がらないと説かれる他、<sup>(23)</sup>紫の上を垣間見た衝撃によって、後の垣間見においても夕霧の視点に女君を花に喩える意識が働くとの見方もある。<sup>(24)</sup>また、「柏木」巻の後半から「横笛」巻においては、源氏と夕霧がそれぞれ視点を担い、互いに相対化しあうとの論が提示された。<sup>(25)</sup>

この他、「身」の例から自己の心情を率直に述べられず、女性の意向に従おうとする夕霧の姿勢や、女三宮の出家に柏木との密通事件を疑ったり、表立たない朱雀院の介在を際立たせたりするように機能する夕霧の対朱雀院意識の希薄さが指摘されたり、<sup>(27)</sup>宇治十帖の展開から夕霧と源氏、匂宮、薫、弁少将らとの関係が問われたりする。

右のように、近年の研究では六条院世界との対比や源氏・柏木・薫との関係、政治体制の面から夕霧の物語が把握

される傾向がある。その結果、夕霧の物語の構造や視点の限界、他の場面と先行する物語からの引用の様相について掘り下げられることとなった。そして、「少女」巻や宇治十帖の展開と表現が積極的に解釈されたことも画期的成果であった。ただ、重点的に分析されるのは、やはり恋物語を中心とする「夕霧」巻の内容や視点人物的役割といった先学以来対象とされてきた部分になる。例えば、「少女」巻以前や「野分」巻以外の玉鬘十帖の夕霧に言及されることは珍しいのではないか。物語第一部から第三部を通して登場機会を有する夕霧の役回りからすれば、より包括的な議論を要するはずだ。特に、元服以前の幼少期の記述、元服や婚儀などの儀礼や「まめ人」以外の表現の特徴など、他の作中人物と関わりが薄く、夕霧個人に帰する事柄にはあまり着目されることがないように思われる。本書が成長という観点から夕霧を捉え直す意図もそこにある。

物語において、夕霧や明石姫君、柏木などいわゆる次世代の人物は第一部の後半や第二部で突然姿を現すわけではない。源氏が年齢を重ね栄進していったのと同じく、物語世界を通じて成長を遂げ、第二部に至るのである。柏木や弁少将、明石姫君、そして冷泉帝まで、源氏世代の次を担う人物はそれぞれに成長過程を経る。それらの中であって夕霧の成長は特徴的であると考えられるのだ。

物語の表現について論じる上でも、唯一殿上する場所が明示される「落標」巻の特殊な童殿上に関わる夕霧を看過することはできない。夕霧の表現の特質は幼少期に限ったことではないものの、子どもの頃には史的世界との接点を持つ特徴的な表現が見受けられる。本書で夕霧に着目する主な理由の一つが史的文脈との関わりである。虚構である物語が有り得べき史的世界をどう構築し、何を表現するのか。その恰好の例として第一章で取り上げるのが童殿上である。童殿上は史実の事例を引いたり、史的役割を投影したりしながら、物語に組み込まれる。その一方、史的意義から外れる部分が語り出されたり、史上の人物を作中人物に重ねつつも物語展開の中で人物像を変化させたりもする。上述のごとく、童殿上は史実との距離を調整し語られる意識的な表現方法と捉えられる。

童殿上に限らず、物語には史的文脈と物語独自の文脈が混在する。夕霧の人物造型で指摘される「まめ人」像は、後者に位置付けられよう。ごく大まかではあるが、夕霧の造型には童殿上という史的文脈と「まめ人」像を付与する物語的文脈が並存すると言える。このような史的文脈と物語的文脈の関係について、正面から扱った夕霧論はあったろうか。本書では夕霧の物語を通じ、虚構として組み上げられる史的文脈と、物語独自の設定に起因する物語的文脈という異なる表現方法が如何に関連するかとの問題を浮かび上がらせたい。それは物語の表現構造をあぶり出す作業であり、夕霧を重点的に論じることの意味でもある。そして、夕霧の幼少期、青年期を中心に、彼の成長が語られる意味や表現の特徴を明らかにし、物語の表現方法の理解に向けた端緒を掴む。

また、子どもをめぐる表現方法という視点では、子どもの成長を象る表現は元より、子どもの詠む和歌、幼少期の通過儀礼など多くの要素が関係する。『源氏物語』において、研究対象として幼時の表現分析がなされるのは光源氏、紫の上、薫ら、一部の人物に限られる。幼少の夕霧を論ずるに当たり、他の人物の子どもとしての記述を参照すべきことは言うまでもない。そうすることで、幼少期が語られること自体の意味が見えてくるのではないか。夕霧を起点に子どもの造型を比較し、これまであまり顧みられてこなかった次世代の人物の生い立ちに関する表現の傾向や役割にも言及したい。

本書の概要は以下である。第一部では、夕霧の童殿上を軸に子どもの成長を語る表現の特徴や傾向の把握を目指す。第一章では子どもを対象とする制度である童殿上について考察する。従って、物語中の童殿上の例を通覧することはおのずと子どもの表現に着目することになる。服藤早苗氏が詳細な史料調査から明らかにしたように、童殿上は殿上前の単なる見習いではなく、家や自身の将来を左右しうる大事であった。<sup>29</sup> 物語における童殿上には家や人物をめぐる表現の偏りが明確に見られ、夕霧の童殿上はその最たる例と言える。童殿上を語ることで作中人物に如何なる印象が